

会員調査から見えてきた現状と課題

関田一彦
創価大学

はじめに

本稿は、会員調査から見えてきた現状と課題に関する略報である。初年次教育学会では、本年5月20日、学会長からの調査協力依頼とともに、全個人会員(524名)を対象に調査サイトのURLを電子メールで配信した。期日までに142名(全会員の27.1%)の方から有効回答があった。そのうちの4年制大学に所属している先生方134名を今回の対象とし、集計結果の一部を報告する。

内訳は国立大学所属会員が21名、公立大学所属会員が10名、私立大学所属会員が103名である。なお悉皆調査のため、各校1名の回答ではない。したがって、会員数の多い大学の現状が、回答割合に反映されやすい点に留意する必要がある。また、調査項目はWebページにして7ページにわたり、かなりの項目数である。そこで今回のシンポジウムでは、時間の関係でそのうちのいくつかの集計結果を報告する(スライド1)。

1. 初年次教育の取り組み方

まず初年次教育に関する全学的な取り組みの方針の有無について確認したところ、30名、全体の22.4%が、全学における方針がすでに定まっていると答えた。それに対して25名、18.7%がまだ定まっておらず、70名、50%以上が現在検討中と答えている。現状ではまだ全学的なものがきちんと定まっているところは少数ではあるが、初年次教育について個々バラバラな部局の対応ではなくて、全学的な対応を決めて取り組んでいこう、という流れは間違いないところと思われる。

2. 今の学生をどのように見ているのか

まず会員の方々が、どのように今の学生の状況を認識しているのか、18問ほど尋ねた。一番目立つところで、「基礎学力の多様化の進行」が挙げられる。「多様化」という言葉は非常に便利な言葉で、実際なにをさすのかは不明だが、少なくとも年々学生が変わってきているということについては、53%の会員が(「大いにある」に「多少ある」も加えると約9割の方が)、学生の多様化について強い認識を持っている。

すこし掘り下げて「基礎学力の全体的な低下傾向」について尋ねたところ、やはり半数、48%の方が大いにあると答えた。初年次教育担当の先生方からすると、学生の基礎学力が年々低下しているということは、大いに実感するところである(スライド2)。

集計結果を丁寧に見ていくと時間がないので、基本的に「大いにある」という回答の割合が高いもの、上位の項目について先にまとめておく。「基礎学力の低下」「学習習慣の欠

如」「指示待ち的な態度の増加」「学習動機の不明確さ」「学習目標の不明確さ」、これらの項目が、かなりの割合で高くなっている。

残り16問ひとつ一つ確認すると、まず「学習習慣の欠如」である。41%の方が大いにあると答えている。それに対して、「学習態度の悪さ」は、「多少ある」という方はそれなりの割合ではあるが、「大いにある」と認識している会員は意外に少なく、11%であった。「あまりない」という方のほうが半数近くおり、学習習慣が身についていない問題はあるが、学習態度そのものはそれほど大きな問題でない、という会員の方が比較的多いのが特徴である。むしろ、「学習動機の不明確さ」というのがやはり30%近くおり、なんのために大学で勉強するのか、やる気がはっきりしない学生が無視できない割合でいる、ことが伺える〈スライド3〉。

前述の受講態度の悪さとも関連するが、「課題や宿題をやってこない」という学生がどの程度いるのかという問いに、「大いにある」という回答は7%と少ない。「学習目的の不明確さ」については「大いにある」が18%、「多少ある」が過半数おり、合わせると8割近い方が、学習目的の不明瞭な学生が目立ってきていると感じている〈スライド4〉。

最近問題にされている、「過剰な受益者意識」の学生の存在に対して64%、3分の2くらいの会員の方たちは、それほど大きな問題になっていないと思っている。むしろ、問題としてあがってくるのが、「指示待ち」の受身な姿勢の学生が非常に多いことである。「多少ある」を合わせると、9割を超える〈スライド5〉。

「人間関係が上手く作れない」、という項目には、多少あるという回答の割合が非常に多いが、明確に「大いにある」という方は少なく、わずか4%であった。同様に、よく話題になるグループ活動が出来ない、アクティブラーニングでグループ活動が大変、という学生についても「大いにある」が意外に少なく、「多少ある」という回答が3分の2を占めた。それに比べ、マナーが身につけていない学生に問題を感じている方がむしろ多い。特別支援が必要な学生の増加については、3分の2の方が増えていると思っているが、「大いにある」と答えた方は比較的少ない〈スライド6〉。

「大学のルールが守れない」という項目も半数の方が「大いにある」と答えている。「基本的な生活習慣」ということでも、「大いにある」が10%、「多少ある」も含めると半数を超える。この中では、むしろ経済的な課題を抱える学生も15%と、比較的高い割合になっている。「家庭の問題」については、7%と比較的少ない。このように、一口に基礎学力の多様化に関係する問題と思われるものでも、先生方の反応には濃淡があるということが分かった。

3. 憂慮する問題

次に、学生ではなくて、大学として憂慮している課題について尋ねた。まず、定員割れの問題については、「多少ある」を含めても半数には達していない。むしろ、中退率のほうが、「多少ある」も含めると問題として認識される方が多い〈スライド7〉。

そのほか、「学費の滞納」については「大いにある」は8%、「多少ある」も含めて約半数である。面白いところでは、大学の問題として「改革の遅れ」を感じている方が19.2%おられる。置いてきぼり感とか、焦りとか、ちょっとこのままではまずいんじゃないか、と感じておられる会員の方が一定数おり、「多少ある」も合わせると、3人に2人がそう思っ

ていることになる。関連して、「改革疲れ」について3割の方が「大いにある」と感じている。もうこれ以上頑張れないぞ、ということであろうか、「多少ある」も含めると4人に3人がそう感じている〈スライド8〉。

それ以外の問いでは、「財務状態」については、これは半数の会員が問題を感じているが、残り半数は、まあそれほどでもないと答えている。意外に多かったのは、「改革疲れ」もさることながら、とにかく「学生指導の負担」が大きくなっているとの認識である。36%の方が「大いにある」と答えており、「多少ある」も含めると、実に85%の方が負担増を感じている〈スライド9〉。

それから、「学習成果の可視化」についても、大きな課題だと感じられる方が30%おられる。「多少ある」も合わせると、やはり85%近くになる。また、高大接続ということで「入試制度の変化」に対しても、大学が抱える問題として認識されている方が、「大いにある」34%、「多少ある」46%という形で、合わせて8割おられる。このように、大学が抱えている問題についても、濃淡のある回答になっている。

4. 初年次教育の課題

大学全体として初年次教育の課題にはどのようなものがあるのか尋ねた。中核となる教員の確保は後継の養成も含めて、4割の方が大いに課題であると考えている。初年次教育の課題として非常に大きなもののひとつに、「教員の養成」があることになる〈スライド10〉。同じように大きな割合で、「担当教員の確保」が問題視されている。養成している余裕もないが、確保そのものも危ういという問題意識を持つ方が相当数おられる。ただ同時に、多分当てはまらないなという方もそれなりにおられると点が面白い。続けて、「初年次教育を担当する職員」についても3分の1の方が、養成や確保に問題があると考えている〈スライド11〉。

それ以上に問題視されているものがまだいくつもある。まずは初年次教育の内容をどうするか、そしてその内容を実際に展開するための教材開発をどうするかも問題として認識されている。初年次教育の内容と教材がとにかく課題・問題だという方が半数近い。これに、「多少当てはまる」も含めると実に9割の方たちが問題であるとしている。同じように、内容や教材だけではなく、それをどのように実践に展開するのか、その方法についても改善の余地が大きい。さらに、そういった教材開発や指導法の改善と併せて「教育効果の検証」についても問題だろうと考えている方が9割近くおられる。初年次教育学会の会員の間で、このあたりの問題意識が高いことがわかる〈スライド12〉。

それ以外にも、「初年次教育に対する学内の理解」に課題を強く感じている方が46%おられる。いまさらまだ理解がないのか？と驚く方もおられるだろうが、もっともっと理解していただかないと難しい、というのが現場感覚だと思われる。理解が進まなければ、体制整備も進まない。全体の49%の方は、初年次教育推進の体制整備に課題ありと強く感じている。「予算の充実」についても4割の方が、大いに当てはまる課題であるとしている。さらに、初年次教育に関してはFD、SDについてもまだまだ足りないようだ、という認識が「大いに当てはまる」「多少当てはまる」合わせて84%に及んでいる。

5. 本会に期待される活動

このように、本会の会員の中にさまざまなニーズがある一方、初年次教育学会がどのようなアプローチをとることを期待しているのかを尋ねた。「大いにある」というニーズの高いところに注目し、ベスト3を選んでみる。まず、今日のような「大会時の情報交換」である。次に、「内容方法の関心を共有する大学との情報交換」である。そして3番目に「学会としての課題研究の推進」となっている。この3つの充実を優先していくことが妥当だと思われる〈スライド13〉。

反対に、「あまり期待しない」という、どちらかというとな消極的な回答の割合が多かったものでは、「他団体との連携」「大会とは別の課題集会」「地域別の情報交換」あたりが浮かんてくる。もちろん「大いに必要だ」という回答の割合も高いが、同時に、消極的な方の割合も比較的多い項目である。

「大会時の情報交換の充実(方法、コンテンツ)」は半数の方が「大いに必要だ」としているが、それに対して「地域別での他大学との情報交換」となると、「大いに必要だ」という回答は35%に下がる。そして、あまり期待しない、という消極的な回答の割合は24%に増える〈スライド14〉。

内容に関して「内容に関する情報の共有」ということでは、47%の方が「大いに期待する」と答えており、多少とも「期待する方」を合わせると、9割を超える。「課題意識を共有する大学」間の交流については、「大いに期待する」28%、「期待する」46%、合わせると過半数を超える。「学会としての課題研究の推進」は4割の方が大いに期待している。「大会のワークショップの充実」についても、「大いに期待する」39%、「期待する」45%ということで、比較的多くの方が期待をされている〈スライド15〉。

一方で、「大会とは別の集会」については、大いに期待する方は21%にとどまる。「他団体との交流・連携」についても、大いに期待する方は17%にとどまり、積極的な方が少なくなっている。この2つの取組みに比べると、会員の支持を集めたのは「学会誌の充実」と「学会が発行する刊行物の充実」である。学会誌の充実については、「大いに期待する」、「期待する」を合わせて83%、刊行物の充実も合わせて79%ということで、それぞれ一定の支持があることがわかる。

6. 学生指導の困難度と初年次教育の課題

ここまで単純集計に基づいた報告をおこなった。最後に一つだけクロス集計を行ったものについて紹介する。最初に報告した、今の学生にみられる課題として挙げた18項目を単純に足し合わせ、学生困難度を示す尺度とした。これは単純に点数が高ければ、困難を抱える学生が多いことを示す〈スライド16〉。

グラフは2つ並んだうち、左側が比較的困難度が低いグループ、右側が高いグループである。比べると明らかなように、困難度の高い学生と日々接している先生方の多くは、教員の養成・育成を大きな課題として認識している。一方、それほどでもない会員間では、あまり問題ではない、あるいはわからない、という回答が30%にのぼる〈スライド17〉。

同じような比較をすると、困難度の低い、比較的問題のない学生と対面している会員の方たちと比べると、問題のある学生と接している方たちは、担当教員の確保についても、職員の確保についても問題があると考えている〈スライド18〉。

教材内容やその開発についても、教育方法の開発・改善についても、困難度の高い学生を多く抱えていると思われる会員間では、半数以上の方が大いに必要だ、大いに課題だという認識を示している。

7. まとめ

ここまでの報告をまとめると、学生の多様化が間違いなく進んでいるなかで、さらに学生のレベル・状態に応じた、会員間のニーズの分極化があるように思われる。そうした中で、まずは一番ニーズの高い、年次大会における情報交換・情報提供の機会の充実が図られる必要があると思われる。関連して、会員のさまざまな課題認識に応じたサービスプログラムの新たな検討も必要かもしれない。おそらく本会の会員が日々接している学生の困難度に応じた教材開発や教育方法の改善について、対象を分けた情報交流の機会やワークショップの提供といったものが、これからの検討課題となるのだろう。以上が会員調査結果の簡単な報告である。

調査概要

実施時期 2015年5月20日～6月13日

実施方法 個人会員524名に、学会長の調査依頼状と共に調査サイトのURLを配信した。

回答率と内訳 142名から回答を得た(回答率27.1%)。その内、4年制大学に所属している134名(国立大学所属21名、公立大学所属10名、私立大学所属103名)の回答を分析対象とする。なお、性別、年齢などの属性情報は採取していない。

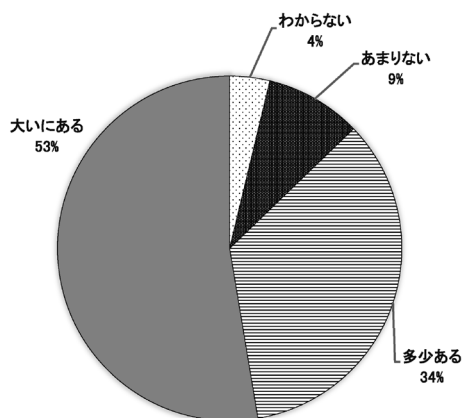
(注)本調査は匿名方式であり、同一大学に複数名の会員がいる場合、その大学の状況が回答割合の上で大きくなる可能性がある。また、同じ大学に所属する会員であっても、個人の認識にはズレがあることも予想される。

初年次教育への取組みについて

初年次教育に関する全学的な方針が「ある」、と答えた会員は30名(全体の22.4%)と低いものの、検討中と回答した者が70名(52.2%)いる。一方、「ない」と答えた会員も25名(18.7%)いた。中でも公立に所属する会員10名中4名が「ない」と答えており、「検討中」と答えた5名と合わせて、9割が全学的な取り組みの遅れを認識している。

1

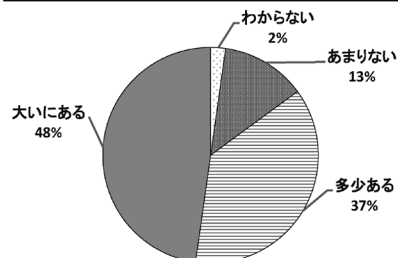
問)あなたの大学では、学生の問題として次の現象や状況はありますか？



1. 基礎学力の多様化の進行

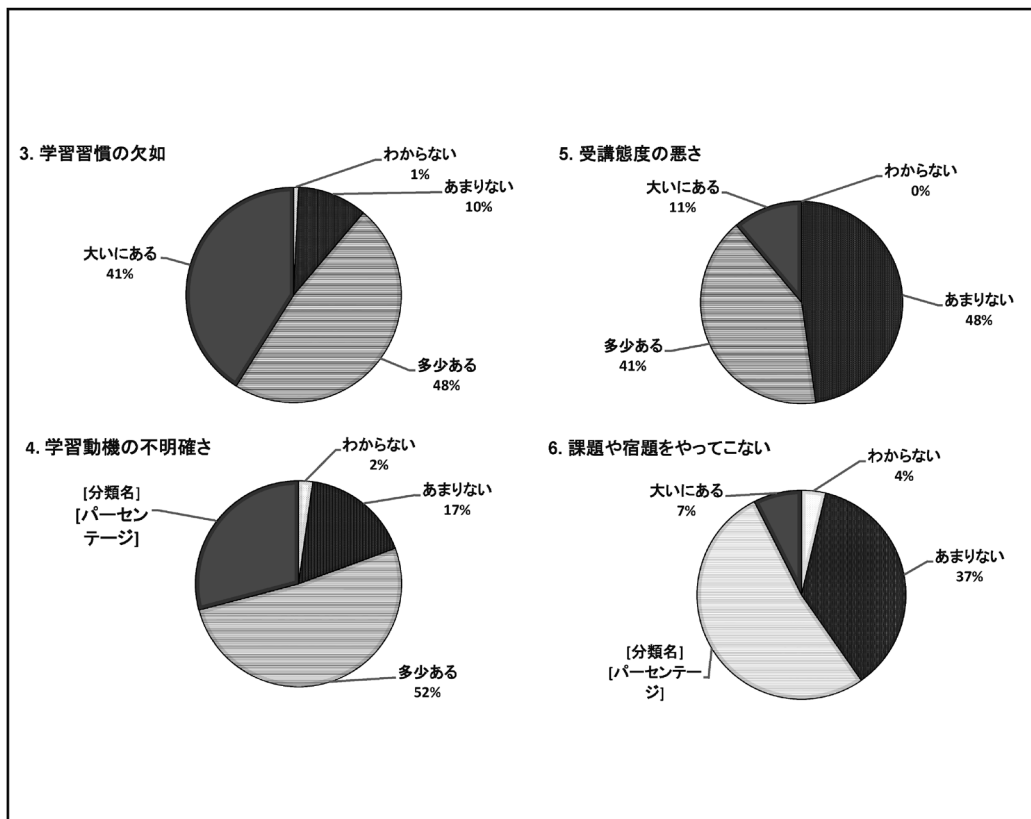
「大いにある」29%以上の項目

- ・基礎学力の低下
- ・学習習慣の欠如
- ・指示待ち
- ・学習動機・学習目標の不明確さ

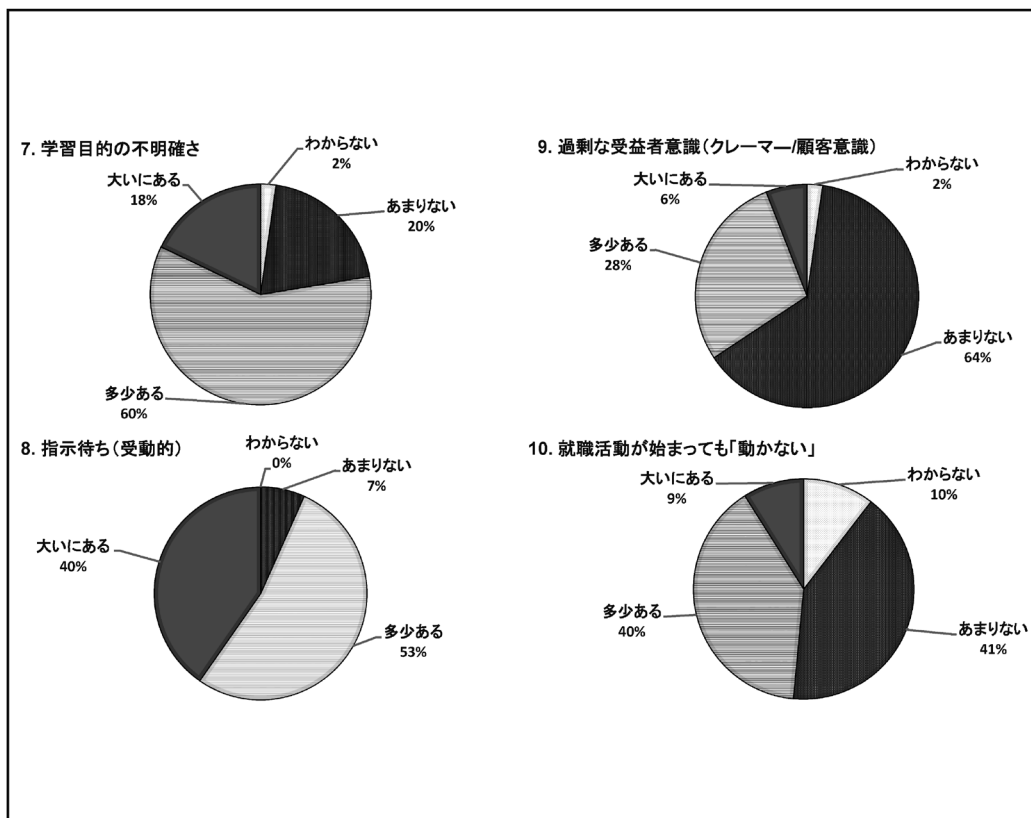


2. 基礎学力の全体的な低下傾向

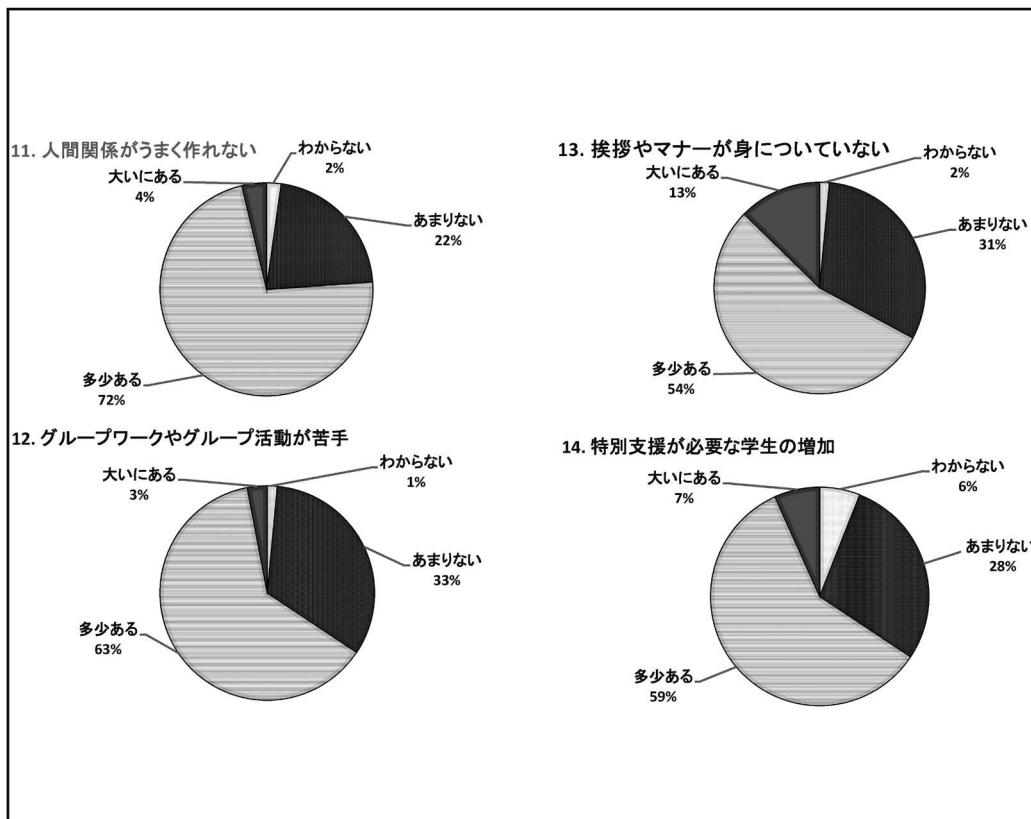
2



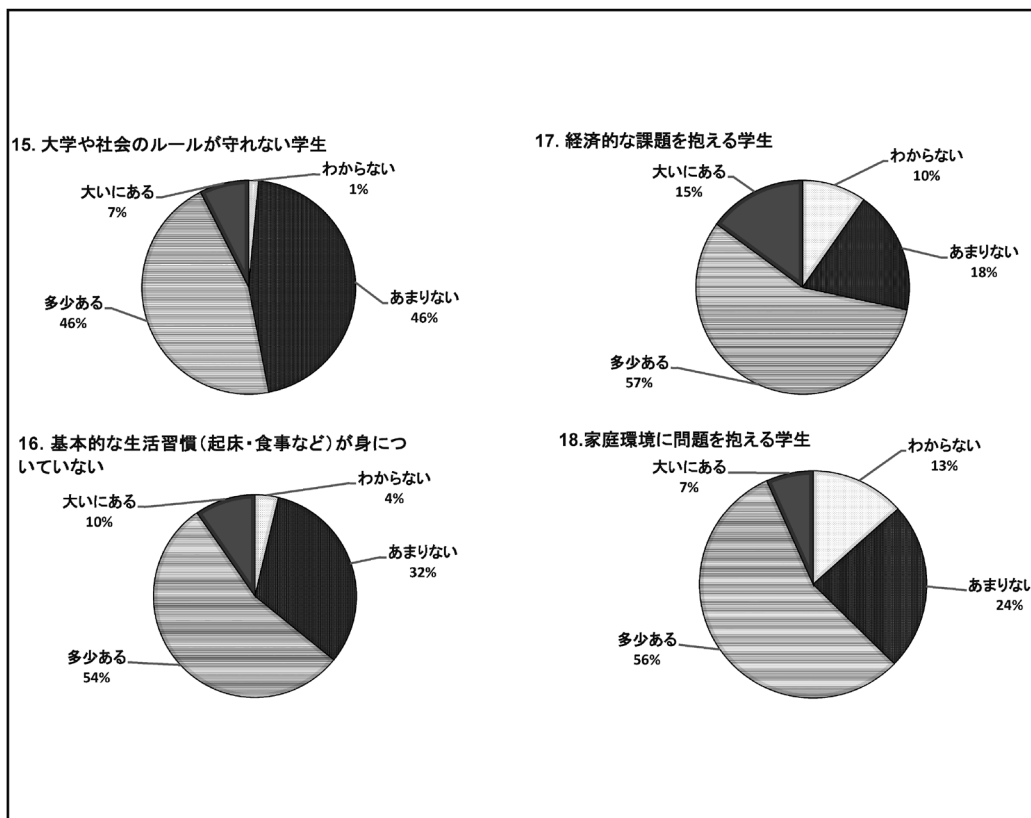
3



4



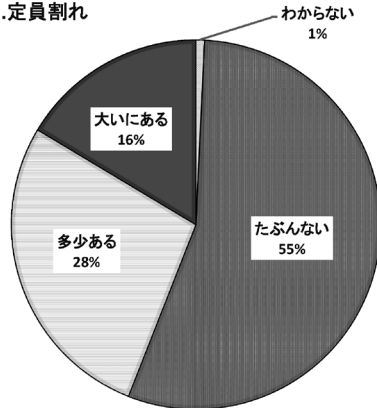
5



6

問)あなたの大学で憂慮すべきと感じる問題が以下にありますか？

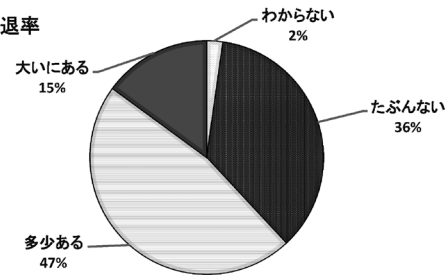
1. 定員割れ



「大いにある」30%以上の項目

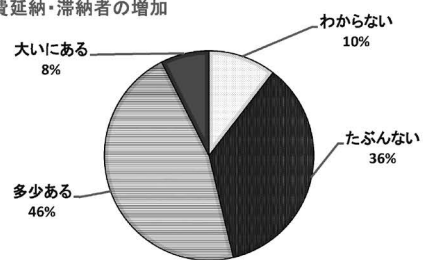
- ・学生指導の負担増
- ・大学入試の在り方
- ・学習成果の可視化
- ・改革疲れ(教職員の徒労感)

2. 中退率

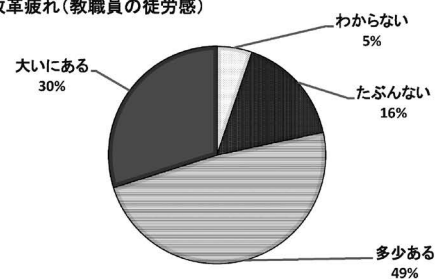


7

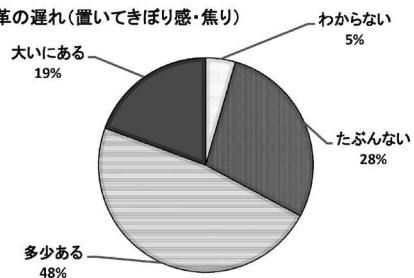
3. 学費延納・滞納者の増加



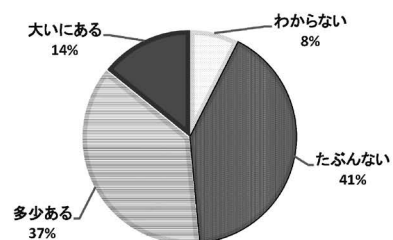
5. 改革疲れ(教職員の徒労感)



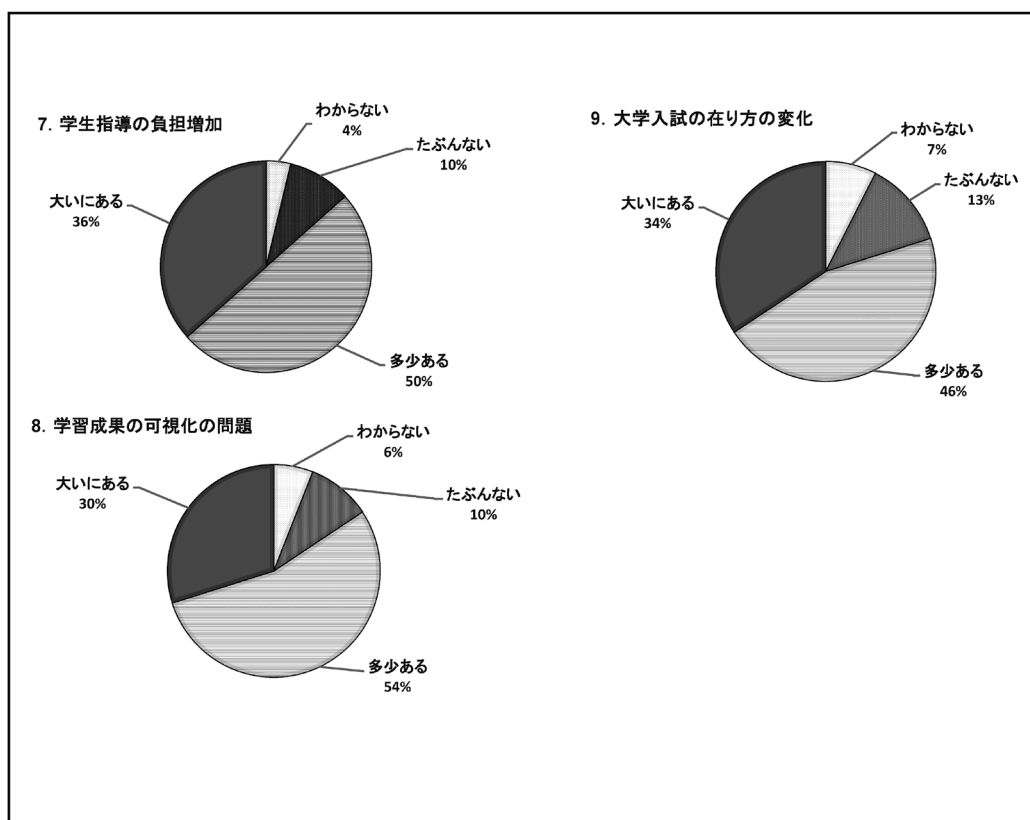
4. 改革の遅れ(置いてきぼり感・焦り)



6. 財務状況の悪化

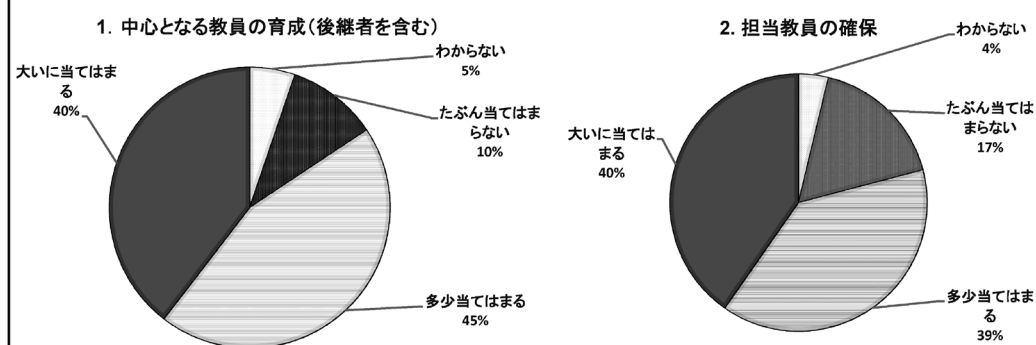


8

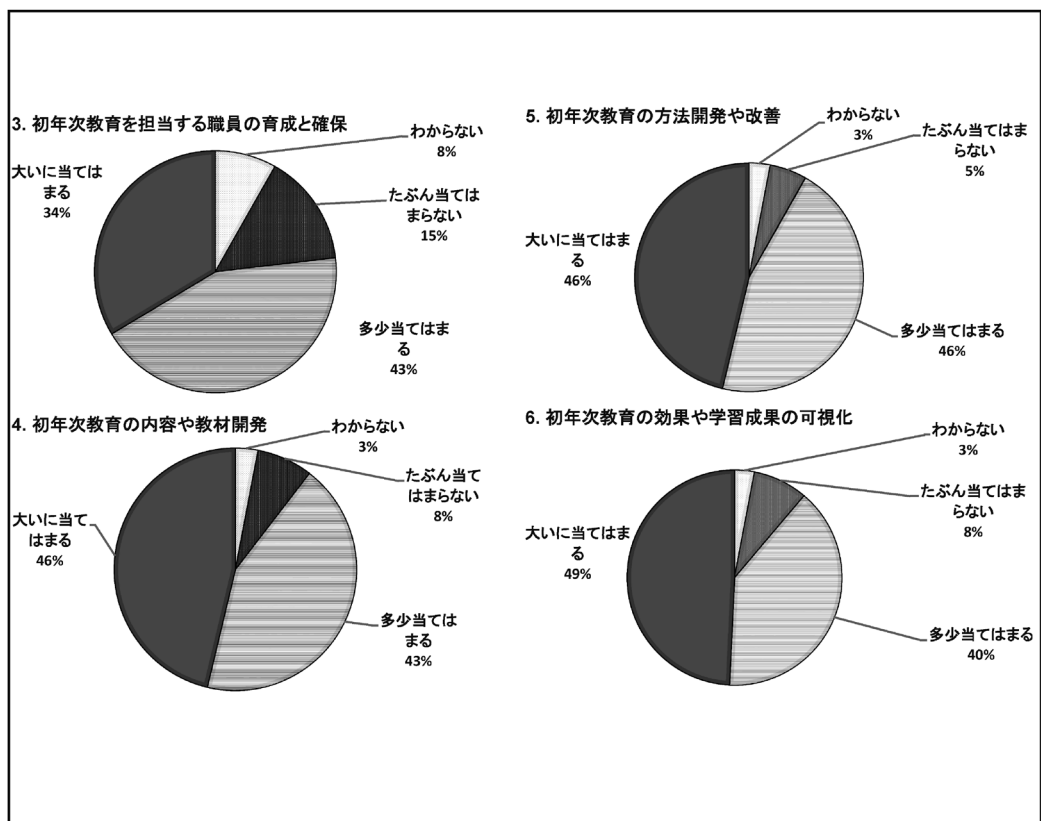


9

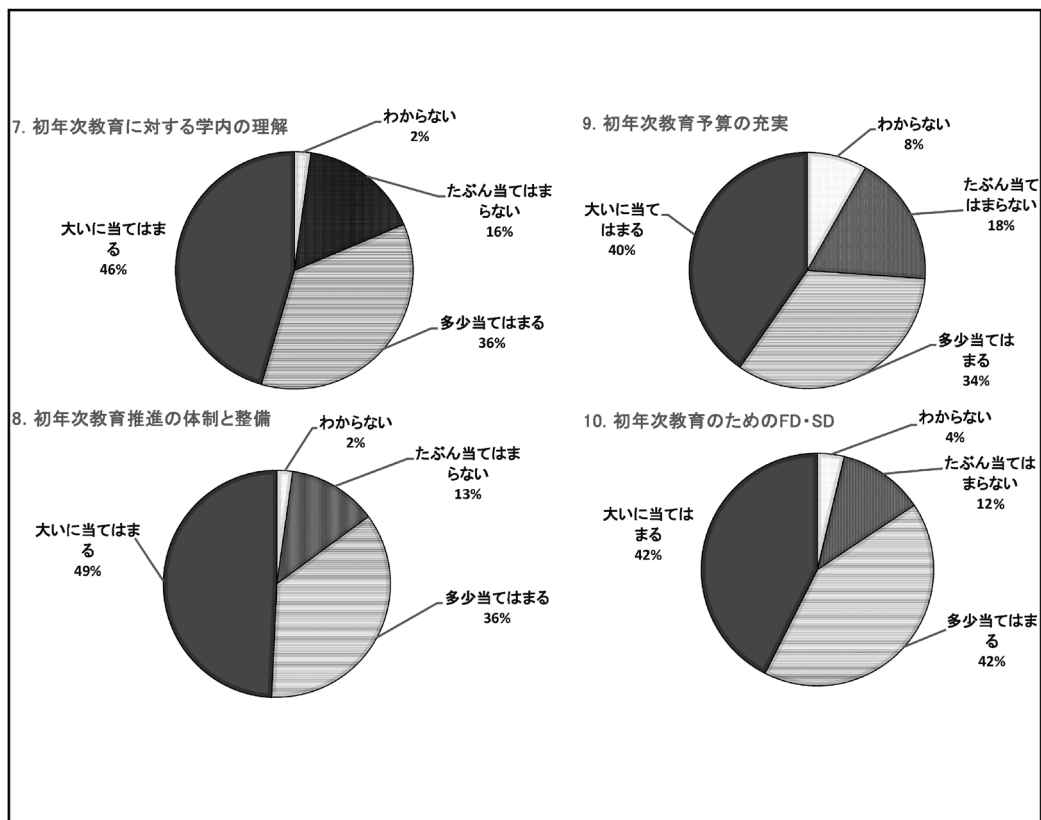
問) あなたの大学では、以下の初年次教育の課題は、どの程度あてはまりますか？



10



11



12

本会が採るべきアプローチに対する期待

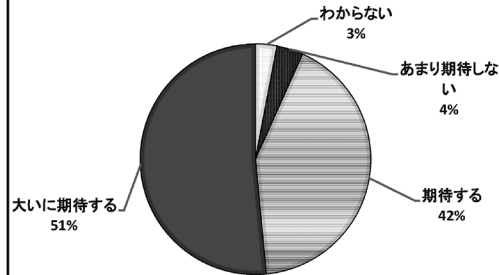
「大いに期待する」ベスト3

- ・学会大会時での情報交換
- ・内容方法の関心を共有する大学との情報交換
- ・学会としての課題研究の推進

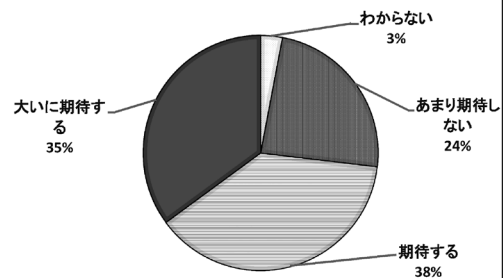
「あまり期待しない」20%以上の項目

- ・他団体との連携
- ・大会とは別の課題集会
- ・地域別の情報交換

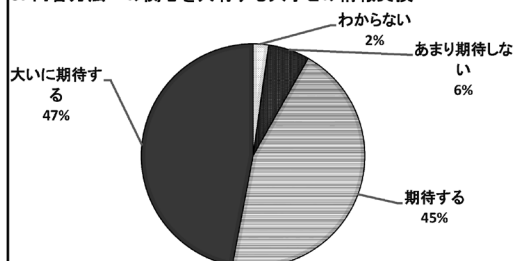
1. 学会大会時での情報交換の充実(方法、コンテンツ)



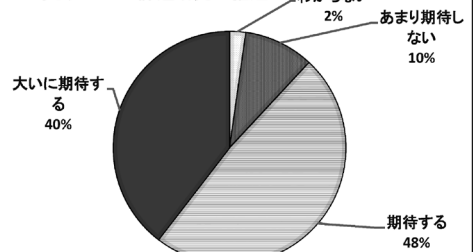
2. 地域別での他大学との情報交換



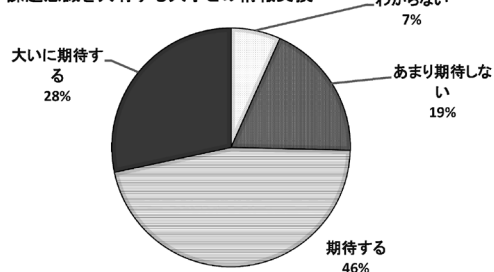
3. 内容方法への関心を共有する大学との情報交換



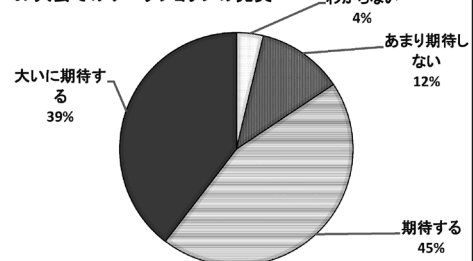
5. 学会としての課題研究の推進

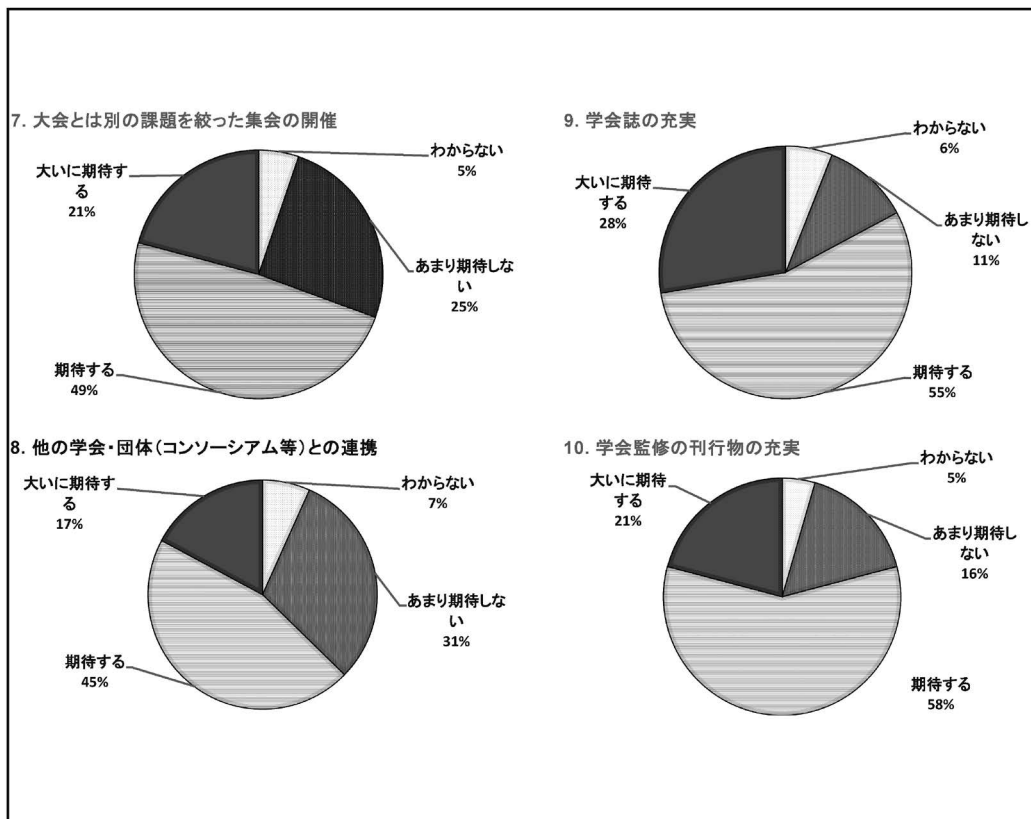


4. 課題意識を共有する大学との情報交換



6. 大会でのワークショップの充実



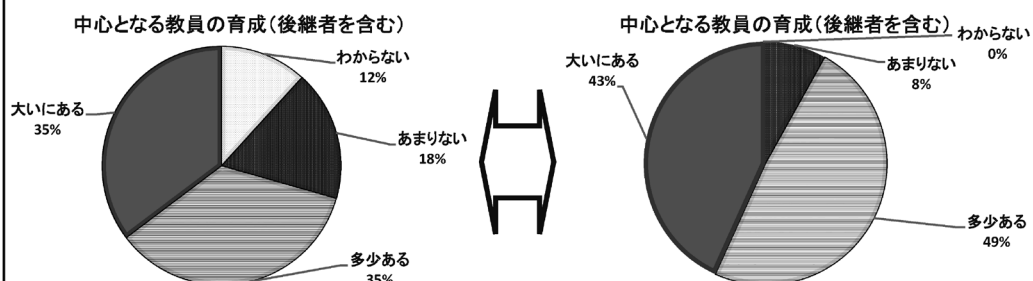


15

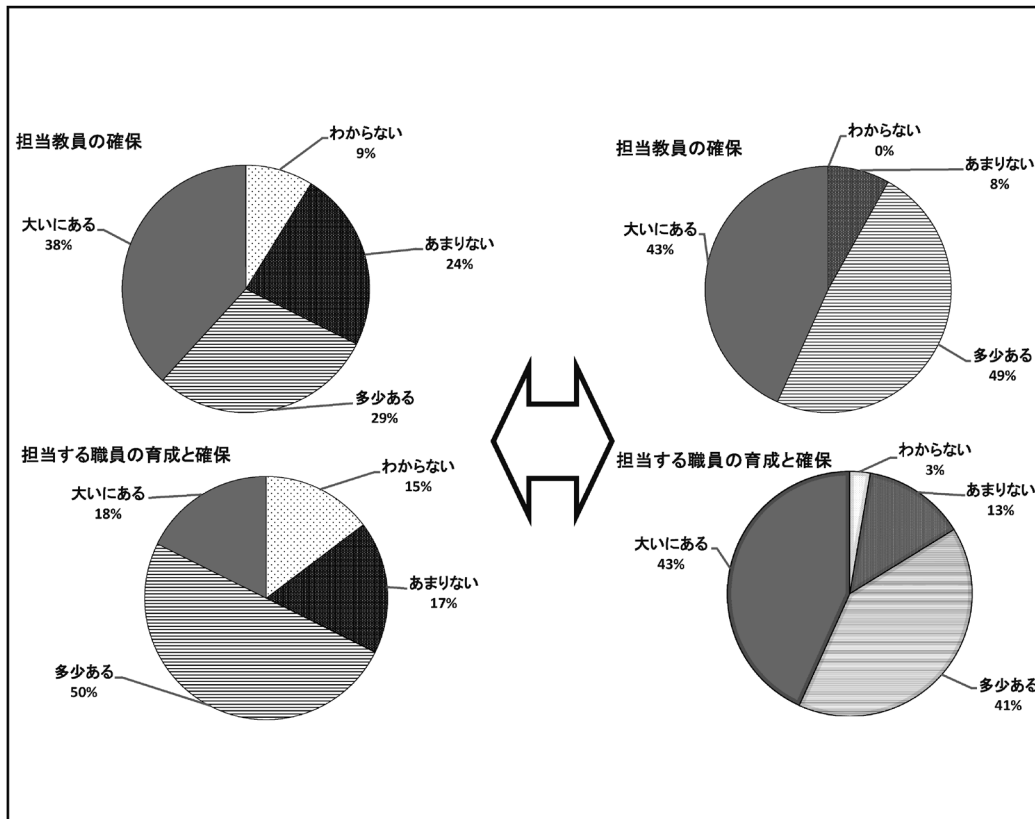
学生指導の困難度と初年次教育の課題との関係

困難度

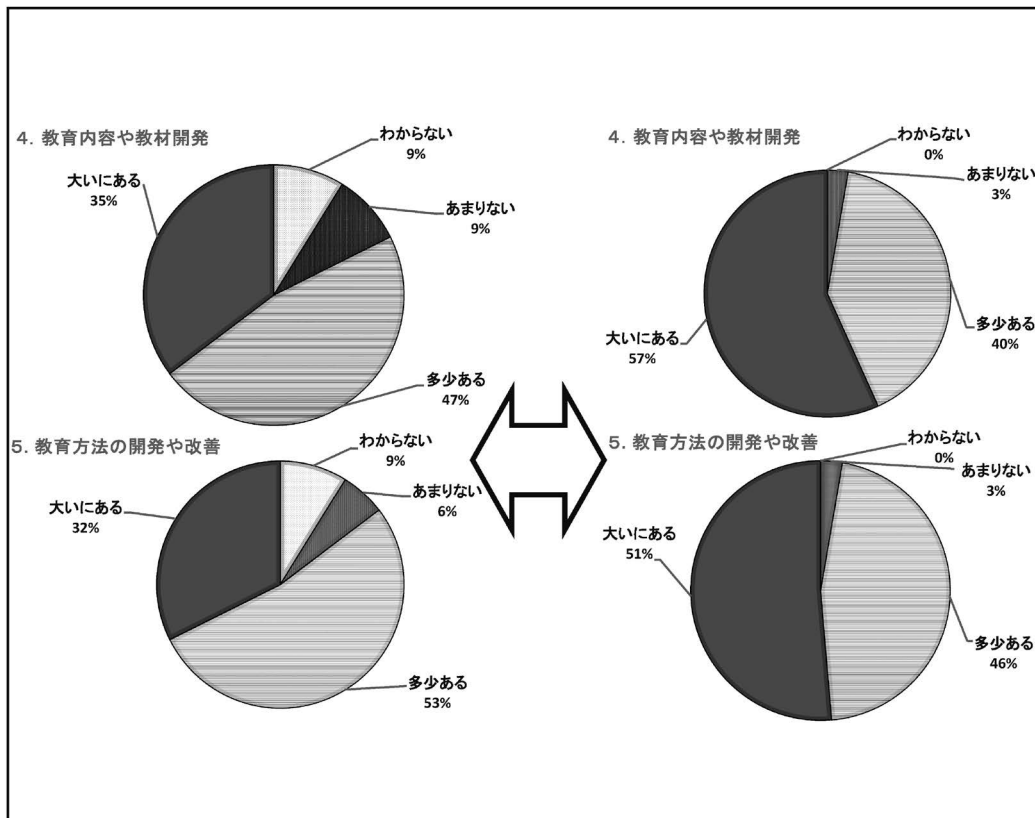
「あなたの学生の問題として、以下の現象や状況はありますか？」という18の状況に対する回答 [大いにある(3点)、多少ある(2点)、あまりない(1点)、わからない(0点)] を加算し、総得点上位25%を「高い」(37名)、下位25%を「低い」(34名)、その間を「中程度」(63名)として分類した。
得点(レンジは54~0点)が高いほど、様々な課題を抱える学生が在籍しているという認識が高いことを示す。
この得点を困難度(指導が必要あるいは指導が難しい学生が多いと認識する割合)とする。



16



17



18